

Title	唐代後半の北邊財政：度支系諸司を中心に
Author(s)	丸橋, 充拓
Citation	東洋史研究 (1996), 55(1): 35-74
Issue Date	1996-06-30
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/155000">http://dx.doi.org/10.14989/155000</a>
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

# 唐代後半の北邊財政

——度支系諸司を中心に——

丸 橋 充 拓

はじめに

一 安史の亂前後の北邊財政諸司

(一) 朔方道水陸運使より六城水運使へ

(二) 安史の亂以後の狀況

二 貞元以降における度支系諸司の設置

(一) 度支巡院の設置

(二) 代北水運使の設置

(三) 度支系諸司の再編成とその後

三 北邊漕運體制の變遷

四 結びに代えて——代北水運使の歴史的意義——

はじめに

唐代後半、あるいは唐宋變革期と呼ばれる時代を理解する上で、地域性に配慮する必要性が提唱されてから久しい。以來二〇有餘年、相當な成果が積み重ねられてきた。そこで今日に至るまでの狀況を振り返ってみると、幾つかの傾向を讀み取ることができる。その第一は、考察の對象がほとんど唐代後半の藩鎮勢力ないし五代の地方軍閥政權に向けられてい

る點である。これは地域史研究が、全國を一律に扱っていたそれ以前の藩鎮研究に對する批判から出發したことに起因している。地域の特性を分析するにあたり、政治的經濟的にある程度の完結性を持つ空間的まとまりの最も上位にあるものとして藩鎮を設定することは、それはそれで充分説得的である。しかし少なくとも唐代の場合、藩鎮としての實質を備えた勢力が全領域に割據していたわけではない。そしてそうした地域においても獨自の特徴を見出すことは可能なはずである。

藩鎮を對象とした地域史研究の中には、藩鎮内部の權力構造や社會關係を明らかにしようとするものとともに、藩鎮の中央との相互關係を分析し、最終的にはこれを指標にその類型化を試みるものがある。<sup>(4)</sup>ところがこの視角は、藩鎮が中央に對してどのような姿勢を保ったかという、言わば政治的文脈で語られるに留まり、制度あるいは財政といった側面からの裏づけが十全に行われていない。これが地域史研究に見られる第二の傾向である。これに對し、制度史・財政史の分野では、まず日野開三郎氏が「抑藩振朝策」をキーワードに唐朝の對藩鎮政策を説明されたものの、<sup>(5)</sup>個々の藩鎮を類別して扱うまでには至らなかった。一方、それ以後の成果には、漕運・專賣制やそれに關わる官制、<sup>(6)</sup>あるいは出土史料に基いて明らかにされた西域の輸送・交通制度など、<sup>(7)</sup>地域間の差異に言わば不可避的に立脚したものが實は少なくない。しかし「不可避」だったところに陥穽があった。「不可避」であることによって、すなわち財政政策における地域差をア・ブリオリな前提として無自覺に受け入れてしまったことによって、それぞれが扱った地域の全國的視野からの位置づけが疎かになってしまった。要するに地域史研究には制度・財政面からの裏づけが缺如し、一方制度史・財政史研究には地域性への自覺が稀薄である、というすれ違いが起こっているのである。

第三の傾向は、驕藩の跋扈した河北や、四川から江南に至る長江周邊が集中的に取り上げられる一方で、北邊を對象としたものが極めて少ないことである。<sup>(8)</sup>ここでいう「北邊」とは對塞外民族防衛の前線に當たる關内道中北部から河東道の太原以北にかけての範圍を指すが、<sup>(9)</sup>唐朝はあらゆる努力を拂ってこの地の整備・充實を圖った。確かに北邊は唐宋

に沙陀族が登場するまで中央の支配下に屬していたから、中央とは對抗關係にある存在としての藩鎮を對象に据えてきた地域史研究の關心を引きにくかったのかもしれない。また北邊は、大規模な邊境防衛軍を維持すべく江淮からの物資に専ら依存していたと理解されがちであったため、財政史の分野でもあまり注目されてこなかったと言える。しかし北邊の状況を具さに吟味すれば、等閑視し得ない顯著な地域性を見出しうるし、また相當に自律的な財政運営を行っていたことも明らかにするのである。

よく知られているように、安史の亂以降、唐朝の財政は度支使と鹽鐵轉運使によって分掌されていた。當時の道區分にしたがえば、前者は關内・河東・山南西・劍南の各道を、後者は河南・山南東・江南・嶺南の各道を擔當した。よって北邊は前者に屬していたことになる。兩司は各管轄地域における財政運営を圓滑に行うべく、獨自の地方出先機關を整備したが、北邊においても度支管下の財政諸司が設けられた。直轄下部機關の整備は、これと並行して構築された穀物自給體制とともに、度支の北邊統治を支える二つの車輪と言って良い。そしてこの兩輪を分析することは、度支による地方財政運営の一端を説明するとともに、強力な藩鎮の存在しない北邊という地域の特質を、財政史の視點より明らかにすることにも結びつくであろう。そこで本稿ではその第一歩として、前者、すなわち度支系財政諸司の整備過程に焦點をあて、論じていくこととした。<sup>(10)</sup>

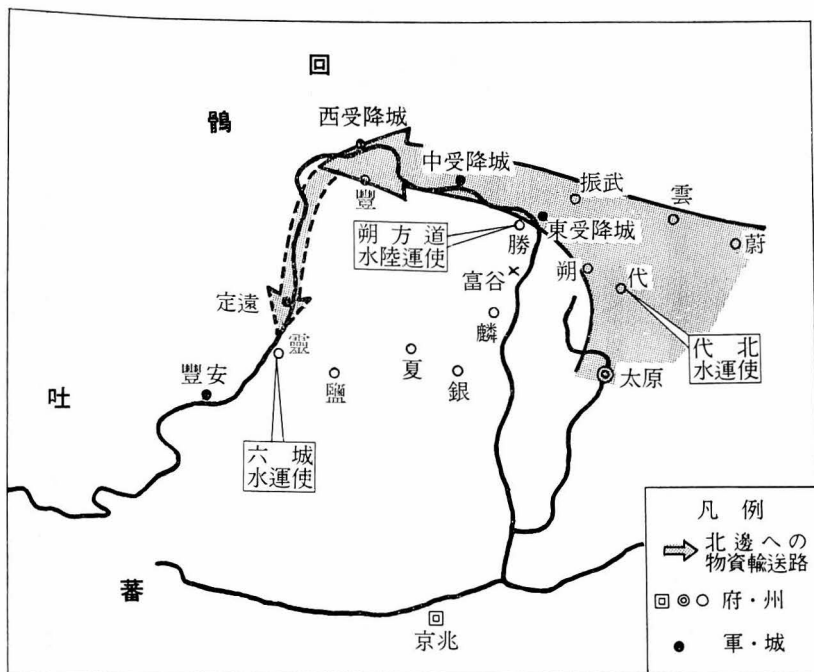
## 一 安史の亂前後の北邊財政諸司

本章では、北邊における度支系諸司整備の前史として、安史の亂前後の状況を考察していきたい。

### (一) 朔方道水陸運使より六城水運使へ

八世紀前半、激しさを増す塞外民族、とりわけ突厥の侵入に備えて各地に節度使が派遣されたが、この時期における北





北邊漕運諸使と輸送路

邊への物資供給はどのように行われていたのだろうか。まず、各道レベルでの物資供給を擔當していたのが支度使である。しかしその管轄はあくまで一道内に留まり、複数の道にまたがる大規模な物資供給に権限を持っているわけではなかった。そこで北邊全域をカバーする新たな使職が現れる。その第一が「朔方道水陸運使」である。『千唐誌齋藏誌』下冊所收の張瑗「唐故榆林郡都督府長史太原王府君墓誌銘并序」(通し番號八六一)に書き連ねられた墓主王承裕の経歴の中には、次のような記載がある。<sup>(11)</sup>

……時に朔方軍節度使・信安郡王(李祿)、其の材幹時に足るも位未だ量に充たざるを知り、騏驥の狹路に於けるを歎き、鸞鳳の卑棲するを惜しみ、因りて奏して本道節度支度判官に充つ。俄かに會寧郡司馬に轉じ、仍りて營田使に充てらる。又た安北都護府司馬兼知軍事に轉ず。何ばくも無くして榆林郡(朔方州)都督府長史に轉じ、兼ねて

朔方道水陸運使・關内道營田副使に充てらる。……坐して連山郡司馬に貶せらる。……開元廿六載冬十一月十五日を以て連山郡の官舎に終わる。……

文中、地名に郡名が用いられていたり、「開元廿六載」という表現が用いられていたりしているのは、これが王承裕夫妻の合葬墓の墓誌として天寶一〇載（七五一）に作成されたためである。先ず彼が朔方道水陸運使に在任していた時期を確定しておこう。手がかりとなるのは「朔方軍節度使信安郡王〔李禕〕による辟召」「開元廿六載（七三八）冬十一月十五日に死去」の二箇所である。李禕は開元一五年（七二七）閏九月から二四年（七三六）四月まで朔方軍節度使の任にあったので、上限は開元一五年とすることができ。しかし李禕による辟召から朔方道水陸運使就任までの間に複数の官歴が見られるから、上限はもう數年下げるべきであろう。また勝州長史・朔方道水陸運使より連山郡司馬に左遷され、それを最後に開元二六年（七三八）十一月に死去している。よって下限は開元二六年前半頃となる。以上より、彼は少なくとも開元二〇年代前半には朔方道水陸運使に在任していたと推測される。

在任時期とともに注目されるのが朔方道水陸運使の治所である。王承裕は朔方道水陸運使とともに勝州長史を兼ねている。つまり朔方道水陸運使は勝州に置かれていたことになる。勝州が北邊漕運の據點であったことは、敦煌發見・開元二五年水部式殘卷（P. 2807）六二～六三行目に、

勝州の轉運水手一百廿人は、均しく晉・絳兩州より出し、勳官を取りて充て、足らざれば兼ねて白丁を取り、並びに二年にして替を與う。

という一條があることから窺える。<sup>(13)</sup>朔方道水陸運使の事例は今のところ他には見出し得ていないので、それ以前の状況は判然としない。ただ「水陸運使」という使職の設置は先天二年（＝開元元年、七一二）の陝州水陸運使が最初であるから、<sup>(14)</sup>朔方道水陸運使が置かれたのは當然開元中ということになる。當時突厥は默啜可汗・毗伽可汗のもと全盛期を迎えていた。朔方道水陸運使が勝州にあったことも、突厥の侵入經路を考えれば充分首肯しえよう。

朔方道水陸運使に續いて登場する北邊財政使職が「六城水運使」である。「六城」が具體的にどこを指すのかについてはこれまで見解が分かれ、また「五城」という括り方もあってにわかには確定しがたい。<sup>(15)</sup>しかしおおむね靈州から黃河沿いに北上し、東へ折れて豐州・三受降城、更に南流黃河に入って勝州・振武軍へと連なる地域を指すという點では諸家一致していると考えてよい。

六城水運使の設立を明確に示す史料はないが、楊行審という人物が開元末に就任したのがその初例と思われる。『文苑英華』卷四一四・孫逖「授楊行審靈州長史制」には次のような記載が見える。

門下。朝散大夫・涼州都督府司馬・河西轉運判官・柱國楊行審、雅より幹術を推し、兼ねて權謀有り。頃ころ武威に在り、克く官政を脩め、能に類いて擧げらる。宜しく郡佐の秩を増し、帥に従いて遷り、仍りて軍城の務を統ぶべし。守靈州都督府長史たるべし。仍お六城水運使に充て、散官・勳は故の如くせよ。

本官を守靈州長史としてのことから考えれば、六城水運使は靈州に置かれていたと言えよう。ではその就任年次はいつごろであろうか。この制文は『文苑英華』の「中書制誥」に採録されているので、發布されたのは起草者孫逖の中書舍人在任期間である開元二十四年（七三六）から二十七年（七三九）四月前後までか、二度目に就任した同二十九年（七四一）となる。<sup>(16)</sup>また文中には、楊行審が涼州都督府司馬・河西轉運判官より「帥（＝河西節度使）に従いて」守靈州都督府長史・六城水運使に遷ったと述べられている。そこで孫逖の中書舍人在任中に河西より朔方に移鎮した人物を探すと、牛仙客がこれに該当し、<sup>(17)</sup>開元二十四年（七三六）秋から二十八年（七四〇）十一月までの間、節度使の任にあった。<sup>(18)</sup>したがって楊行審が六城水運使に任じられたのは開元二十四年秋から二十七年四月頃までと限定される。

さて、先の考證で王承裕が開元二〇年代前半に朔方道水陸運使であった、つまり朔方道水陸運使がそのころまで存続していたことが既に判明している。そしていま楊行審の六城水運使就任時期が開元二十四年秋から二十七年四月頃までの期間にあることが明らかになった。この二點を整合的に説明しようとすれば、開元二十五年（七三七）前後に「朔方道水陸運使よ

り六城水運使への交替が起こった」ということになる。さらに嚴密に言えば、朔方道水陸運使が廢止され、代わって六城水運使が新たに設置されたというよりも、朔方道水陸運使が靈州へ移轉し「六城水運使」と名を改めたと考える方が正しいのかもしれない。というのは、時代は下るが安史の亂直後に六城水運副使であった魏少遊という人物の肩書が、史料によつては「朔方水陸轉運副使」とも記されており、「朔方道水陸運使」と「六城水運使」の間に名稱上の系統性を想定しうるからである。<sup>(19)</sup>當時の對外情勢は、突厥が開元一九年の闕特勤の死去と同二二年の毗伽可汗の暗殺によつて衰え、代わつて吐蕃が主たる邊患となりつゝあつた。<sup>(20)</sup>前者の侵入經路が陰山山脈越えだつたのに對し、後者の入寇は河西回廊ないし青海方面からであつたということを考えれば、北邊の財政據點を勝州から靈州へ移す動機は充分認めうるといえよう。

開元二九年（七四一）になると、六城水運使は朔方節度使によつて兼任されるようになる。『唐會要』卷七八・諸使中・節度使・朔方節度使條には、

〔開元〕二十九年、王忠嗣を除し、又た水運使を加う。

との記載があり、また『新唐書』卷六四・方鎮表・朔方節度使・同年條には、これが朔方節度使による六城水運使兼任の嚆矢であつたことが述べられている。それまで勝州長史・靈州長史といった地方の次官クラスが就任していたのに比べ、六城水運使の地位は一段階上昇したのである。これにともなう具體的な權限擴張があつたのか否かは不明だが、六城水運使の重要性に對する評價・認識が高まつたことは明白である。

## (二) 安史の亂以後の狀況

安史の亂の勃發は北邊防衛體制にも大きな動搖を與えた。河北・山東を占據され、江淮との連絡も絶たれた朝廷が、朔方・河東兩軍を反亂勢力との戦いに投入したため、邊境の備えに空白が生じたのである。當時西方より勢力を伸ばしつつあつた吐蕃はこれに乗じて關中に侵入し、北邊を大混亂に陥れた。

北邊における物資供給體制もまた、その影響を免れなかった。それを證するように、この時期に六城水運使が實際に漕運業務を行っていたことを示す記録は全く見られない。確かに六城水運使はこの間も引き續き朔方節度使によって兼任され(後掲表1)、下部組織も存續していた。<sup>(21)</sup>しかしこのころ朔方節度使に就任した人物は郭子儀をはじめそのほとんどが有力な將帥であり、<sup>(22)</sup>吐蕃の侵入に應じて各地を轉戦していたから、六城水運使はほとんどその實質を失っていたとも考えうる。

かくの如き戰時體制下においては定期的・定額的な物資補給は行い得ず、必要なとき必要なだけ徴收するというやり方に對應しうる體制が求められたであろう。そこで設けられたのが糧料使という使職であった。『冊府元龜』卷四八四・邦計部經費・建中四年(七八三)條は糧料使の職掌を以下のように説明している。

諸道行營、其の境を出する者、糧料は皆給を度支に仰ぐ。之を食出界糧と謂う。又た諸軍に於いて各おの臺省官一人を以て其の供億を司らしむ。之を糧料使と謂う。

ここからもわかるように糧料使は出動軍隊それぞれに派遣され、度支から支給される軍糧、食出界糧の受領・配分を擔った。ただし、この段階では中央の一臺省官が任命されるというだけで、糧料使と度支との間に明確な統屬關係はない。またあくまでも臨時に置かれる官司であり、戰鬭が終息して出動軍隊が管轄地に戻ればその使命を終えるという點も注意しておきたい。糧料使に關しては室永芳三氏に專論があるが、<sup>(23)</sup>それによれば糧料使は供軍糧料使・供軍使・運糧使・軍糧使とも稱され、食出界糧の配分以外にも地域の特殊性に應じて様々な財務運営を行ったという。北邊では早くも寶應元年(七六二)には陳少遊という人物が廻紇糧料使に、また永泰元年(七六五)に路嗣恭が朔方軍糧使に任じられている。<sup>(24)</sup>

代宗朝の後半になると、北邊における本格的な漕運復興が度支によって開始された。『新唐書』卷五三・食貨志三は、以下のように傳えている。

初め度支歲ごとに糧を北都に市い、以て振武・天德・靈武・鹽・夏の軍を贍うも、錢を費やすこと五六十萬緡にし

て、河を浜るの舟の溺るること甚だ衆し。

この記事は建中元年（七八〇）に楊炎が實施した屯田について觸れた箇所直前に現れるもので、「初め」とは代宗朝後半を指すと思われる。これに據れば、太原で和羅した穀物を黃河を遡航して北邊各地にもたらすようになったという。「歳ごとに」「錢を費やすこと五六十萬緡」という表現から、定期的・定額的な物資供給が、困難を伴いながらも回復しつつあったことを窺うことができよう。ただ度支のもと、どのような地方組織が各地で實務を遂行したのかについては記述がなく、詳らかにできない。<sup>(25)</sup>

以上のように、安史の亂後、吐蕃の侵入によって混亂した物資供給體制は、肅宗・代宗兩朝を通じて復興の兆しを見せ始めた。しかし度支を支える地方出先機關は決して充分に組織化されていたとは言いがたい。不時の物資需要を擔った糧料使にしても、あくまで臨時に置かれる官に過ぎず、度支との明瞭な統屬關係はなかった。度支の下部機關が本格的に整備されるのは、次章で述べるように貞元以降、度支巡院や代北水運使の設立を待たなければならなかったのである。

## 二 貞元以降における度支系諸司の設置

律令官制下において尙書戸部の一支部に過ぎなかった度支は、財政の規模擴大・複雑化に伴って次第に重要性を増し、徳宗の初めに兩稅法が施行されるや、中央財政の統括者としての地位を不動のものとした。<sup>(26)</sup>そして度支管下の地方出先機關たる度支巡院・代北水運使も、これにともなうて徐々に整備されていくのである。

一方、建中年間に一旦沈靜化していた吐蕃の侵入が貞元二年（七八六）に再開すると、唐朝はまたもや大規模な防衛措置を迫られることとなる。<sup>(27)</sup>對外關係のこうした緊迫も、北邊を統括する度支の下部機關を擴充させる一因となったに相違あるまい。

## (一) 度支巡院の設置

唐代後半、二大財政機關たる度支使・鹽鐵轉運使は國の財政を西北と東南に二分して擔當した。そして兩司の地方出先機關として設けられた巡院がこの地域分掌制に従って度支使と鹽鐵轉運使とに分屬せしめられていたことは、高橋繼男氏により明らかにされている。<sup>(28)</sup>代宗時代に成立した分掌制が德宗の初めに一時崩れ、その後曲折を経て貞元八年(七九二)に復活するまでの経緯と、その間に巡院が整備されていく過程については高橋氏の詳述されるところであり、最早贅言は不要である。ただ本稿と関連して強調しておくべきことは、この時期北邊においても度支巡院が整備され、既存の糧料使とともに度支による物資調達の一翼を擔うようになった點である。北邊においていつごろから巡院が置かれ始めたかについて、現存の記録から明らかにすることはできない。ただ巡院の物資調達機能が緊要の現實的課題としてクローズアップされるようになるのは、やはり吐蕃の侵入が再開された貞元二年(七八六)以降であつたと思われる。

度支巡院が果たした役割を明らかにするに當たり、有力な手がかりを與えてくれるのが、貞元八年(七九二)、陸贄によって上奏された壯大な北邊への軍糧供給計畫である。<sup>(29)</sup>この中で彼は、その年の江淮地方における凶作(穀價騰貴)と關中における豐作(穀價下落)を踏まえ、①江淮上供米を削減し、その分を江淮で安價で賣り出すこと、そして②關中においては上供米削減分を和糴で補填し、その財源を江淮からの布帛および漕運費用削減によって浮いた分に求めることを提案した。そしてこの上奏文より、度支巡院が和糴を實施する上で果たした三つの役割が明らかとなる。その第一は、和糴實施に先立って地域ごとの穀物價格を調査し、買入れ可能な穀物の量を見積ることである。上奏文の該當箇所を挙げよう。

臣已に度支巡院をして諸軍州の米粟時價を勘問せしめ、兼ねて當管の長吏と商量し、見墾の田を計りて糴するところの數を約定せしむ。鳳翔・涇隴・邠寧慶・鄜坊丹延・夏綏銀・靈鹽・振武等道、良原・長武・平涼等城の報を得る

に、度支羅を旋して軍に供するを除くの外、別に儲備に擬せらるる者は、計るに粟一百三十五萬石を羅し得べし。

巡院の價格調査機能はその設置當初、劉晏の時代から重要視されていたものであり、<sup>(30)</sup>これもその延長線上で理解しうるであらう。第二の役割は、以下の如く在地の地方官とともに和羅粟の授受に携わることである。

請うらくは各おの當道節度及び當城兵馬使に委ね、監軍中使並びに度支和羅巡院官とともに受領し、便ち計會和羅せんことを。

この奏請は、二年後に提出された陸贄の上奏文の、

元敕に准り、當道節度及び監軍中使・度支知巡院官に委ねて檢納を勾當せしむ<sup>(31)</sup>。

という記述より、裁可され實施に至ったことがわかる。そして第三の役割は和羅實施の際に起こる官吏の不正を監視することである。ただし陸贄が、

巡院を設けて相監臨せしむると雖も、既に綱條を失い、轉た囊橐を成し、空しく簿帳を申し、僞りて困倉を指すもの有るに至る。其の數を計らば則ち億萬有餘なるも、其の實を考うれば則ち百十不足なり。巡院は巧みに會府<sup>あさむ</sup>を誣き、會府は詐りを承けて以て上聞す。

と指摘している點からわかるように、地方官を監察すべき巡院が自ら不正を働くことも少なくなかったようである。<sup>(32)</sup>

以上のように、巡院は豫備調査・穀物授受・不正監察と、和羅業務の事前より實施中、事後に至るまでの全過程に權限を有した。北邊において度支が行うべき政策には他にも漕運や營田などがあり、巡院が和羅と同様これらにも何らかの關わりを持っていたことは充分豫想できるが、それを裏づける根據は今のところ見出せていない。<sup>(33)</sup>前掲上奏文中で陸贄が「和羅巡院」という表現を用いており、同種の表現が他の史料にも見えることから考えれば、<sup>(33)</sup>北邊における度支巡院の役割はやはり和羅が中心であったと言えそうである。



表1 六城水運使・代北水運使等事例

氏名	年次	官名	本官・兼任官	出典
王承裕	開元中	朔方道水陸運使	勝州都督府長史	千唐861
楊行審	開元末	六城水運使	靈州都督府長史	英414
王忠嗣	開元29(741)	六城水運使	朔方節度使	會78
李林甫	天寶10(751)	六城水運使	朔方節度使	冊329
魏少遊	至德元(756)	六城水陸運副使		新紀・舊115・鑑218
郭子儀	元年(762)	六城水運使	朔方節度使	冊129
僕固懷恩	廣德3(764)	六城水運使	朔方節度使	舊紀・冊164
郭子儀	大曆14(779)	六城水運大使	朔方節度使	舊紀
李懷光	興元元(785)	六城水運使	朔方節度使	舊121・冊176
薛審	貞元末—元和初	京北水運使	代北營田使・ 監察御史裏行	劉禹錫集29・新159・鑑239・冊510
韓重華	元和7(812)	振武京西水運使	京北五城營田副使・ 振武京西和羅使・ 侍御史	昌黎集21・新53・新159
(任 佖)	元和中	(度支水運使?)	度支振武營田使	李文公集14
賀拔志	長慶末(824)	度支水運使	振武營田使	冊511・舊166・新119
司空興	開成3(838)	水運使		冊498
唐持	大中末(859)	靈武六城轉運使	朔方節度使	舊190
支謨	乾符3(876)	代北水陸發運使	雲州防禦使	鑑253考異『後唐太祖紀年錄』
段文楚	乾符5(878)	代北水陸發運使	大同(雲州)防禦使	新218・鑑253

※千唐…『千唐誌齋藏誌』, 英…『文苑英華』, 會…『唐會要』, 冊…『冊府元龜』,  
新…『新唐書』, 舊…『舊唐書』, 鑑…『資治通鑑』

## (二) 代北水運使の設置

度支巡院に續ぎ、貞元半ばには代北水運使が創設された。代北水運使についてはこれまでごく簡単な説明がなされているに過ぎない。青山定雄氏が最も紙幅を費やして述べられているが、これも具體的事例の跡づけをされたにとどまる。<sup>(34)</sup> として何より問題なのが、代北水運使をそれ以前の六城水運使と同一系列上に置いてしまっている点である。表1は青山氏が列擧された事例に筆者が見出したものを若干追加し、更に必要となる情報を増補したものである。<sup>(35)</sup> この表より明らかな如く、六城水運使は興元元年(七八四)の李懷光を最後に、大中末の唐持までの間文獻上に現れず、この間を埋めるように代北水運使が登場する。六城水運使の廢止や代北水運使の設置を傳える記録がな

表2 代北水運使の文獻別肩書名稱

	舊唐書	新唐書 《( ) 内は卷數》	通鑑	冊府元龜	その他
薛 審		代北水運使(159)	代北水運使	代北水運使	京北水運使**
韓重華		代北水運使(159) 振武京西水運使(53)			
賀拔志	水運使			度支水運使	
司空興				水 運 使	
支 謨			代北水陸發運使*		
段文楚		代北水陸發運使(218)	代北水陸發運使*		

——線を挟んで、上は「代北水運使」に名稱が固定される以前、下は以後の事例

太字：後世編纂史料による遡及的表現と考えられるもの

\*…『通鑑考異』所引・趙鳳『後唐太祖紀年錄』

\*\*…『劉禹錫集』所收の薛審神道碑

く、<sup>(36)</sup>且つ地域と職掌が重なり合う點から、兩者をつなげて考えてしまうのもやむを得ないところではある。しかし子細に調べてみると、代北水運使が六城水運使とは全く異なる性格を持つ使職であることが判明するのである。

代北水運使について先ず觸れておかなければならないのはその名稱の變遷である。表2に目を向けていただきたい。この表は代北水運使の名稱表現を、表1に挙げた各事例に即して文獻別に整理したものである。本表より、史料の性格とそこで用いられる表現との間に一つの法則性があることが明らかとなる。すなわち、神道碑や上奏文など文面がそのまま保存された同時代史料の場合には全く統一性がないのに對し、『新唐書』や『資治通鑑』といった後世の編纂物では「代北水運使」という呼名が現れるのである。これはとりもなおさず、創設當初は不統一だった名稱が後に「代北水運使」に固定されたという意味に他なるまい。では名稱が固定された時期はいつころであろうか。「代北水運使」の呼稱を用いた最初の同時代史料は、次に挙げる敦煌發見・韋澳『諸道山河地名要略』殘卷(B・251)五九～六〇行目・代州條の記事である。

#### 〈史料A〉

今〔代州〕刺史の理所爲り。兼ねて代北水運使院を置く。

この『諸道山河地名要略』という書物は大中九年（八五五）にはすでに完成していたことが判明するので、<sup>(37)</sup> 大中年間には「代北水運使」に固定されていたことになる。次節で述べるが、當初北邊全域にわたった代北水運使の管轄地域は、會昌初に回鶻が北邊を侵擾してより次第に縮小し、最終的には文字どおり代北地方のみになった。したがって「代北」という地域名が冠されたのはこの時期、すなわち會昌から大中前半頃と推測される。これを表2の事例に立ち返って確かめれば、元和中の韓重華を「振武京西水運使」とした『新唐書』卷五三（食貨志）および乾符中の支諤・段文楚を「代北水陸發運使」とした『新唐書』卷二一八（沙陀傳）・『資治通鑑考異』所引『後唐太祖紀年錄』の表現は、ともに同時代の名稱を反映したものと言えるが、貞元ないし元和中の薛謩・韓重華を「代北水運使」とした『新唐書』卷一五九（盧坦傳）・『資治通鑑』および『冊府元龜』の記述は、いずれも後世に固定された呼名をそれ以前の事例にまで遡って用いたもの、ということになる。<sup>(38)</sup> 以上のような曲折を踏まえれば、本稿でも逐一呼稱を使い分けるべきところではあるが、それでは行論が繁雑に流れる危険性がある。よって特に差し支えない限り「代北水運使」に統一することとする。

代北水運使の創設時期を明確に示す記録は見出し得ないが、その初出記事は『冊府元龜』卷六〇・帝王部立制度・貞元十一年（七九五）二月條の、

#### 〈史料B〉

十一年二月、度支水運・供軍の印を置く。

という一文である。具體的な考證は以下で行うとして、ここに見える「度支水運使」とは代北水運使のことである（供軍使については次節で觸れる）。印の使用が官司そのものの設置に先立って認められることはあり得ないから、代北水運使が設立されたのは貞元十一年二月より前と言える。また前章で取り上げた貞元八年（七九二）の陸贄による北邊和羅實施の際、すでに存在していたなら史料上に現れてきても不自然ではない代北水運使の名は全く登場しない。これらを勘案するに、代北水運使が置かれたのは貞元一〇年（七九四）ころと推定できるであろう。貞元一〇年といえば、陸贄による和羅に續

いて屯田開發も徐々に再開され、北邊における食糧自給体制が回復し始める時期である。<sup>(39)</sup> 代北水運使はこうした事態に即して設けられたに相違あるまい。

代北水運使の擔った役割については、『劉禹錫集』卷二九に收められた「唐故福建等州都團練觀察處置使福州刺史兼侍御史中丞贈左散騎常侍薛公神道碑」より、その概要を窺うことができる。以下に該當部分を示そう。

### 〈史料 C〉

貞元中、上、丞相と兵食を調するに方り、吏治に通じ邊事に習う者を得んことを思う。計相、公を以て對と爲す。乃ち監察御史裏行を授け、京兆水運使に充つ。雁門に局居し、穀糴を主り、舟楫を具え、勇壯且つ弓矢に便なる者を募りて榜夫と爲すこと千有餘人、尺籍伍符に隸し、制は舟師の如し。詔して中貴人を以て之を護らしめ、聲塞上に震う。粟を發し河を洑りて北行する毎に、戎落を涉り以て緣邊諸軍及び乘障の者に饋り、河塞回遠と雖も必ず克期すること符を合するが如く、一歲中に費を省くこと萬もて計る。

ここに登場する薛謩は管見の限り代北水運使就任者の初例である。<sup>(40)</sup> これによれば、代北水運使は雁門（代州）に置かれ、河東で和糴した穀物を黄河を遡航して流域各地に搬運した。前章第二節で、代宗朝後半に太原で和糴した食糧を北邊各地にもたらす体制が整ったことを述べたが、ここに見える漕運はそれを引き繼ぐものであろう（前掲地圖参照）。

さて、先に六城水運使と代北水運使はまったく性格を異にする使職であると述べたが、以下でそれを明らかにしていこう。結論を先に言えば、兩者の違いは、前者が一地方官であったのに對し、後者が度支の出先機關であったことに盡きる。六城水運使が一地方官であったことは、前章で述べたように朔方節度使（靈武節度使）によって兼任されていたことから明らかである。一方、代北水運使の場合、『冊府元龜』卷五一・邦計部誣調・賀拔志條に度支に屬していたことが明記されている。

### 〈史料 D〉

穆宗の時、度支水運營田使と爲る。<sup>(41)</sup>長慶四年六月丁亥、振武軍節度使奏すらく「志、刃を以て自割せるも死せず」と。志、前に營田の數實を過ぐるを奏し、將て功效を圖る。主客郎中白行簡に命じて覆驗せしむるに及び、志其の懼に勝えず、遂に自裁せんと欲す。

代北水運使を地方官と假定した場合、冒頭の「度支」を「支度」の誤りと解して「支度・水運・營田使」と校訂する考えもあるいは成り立ちうるだろう。「度支使」と「支度使」は周知の通り史料上しばしば混同され、判別の際には中央官か地方官かを指標とするのが一般的だからである。しかし筆者は原文通り「度支水運・營田使」、即ち水運・營田使が度支の配下にあると解釋するのが正しいと考える。『冊府元龜』卷四九八・邦計部漕運の次の記事をその根據として挙げよう。

#### 〈史料E〉

〔開成〕三年四月、度支使杜棕奏すらく「水運院は舊制代州に在り。開成二年、省司營田・發運の公事を去ること稍や遠きを以て、遂に院を振武に移すことを奏す。臣水運使司空輿の狀を得、兼ねて往來の人備さに院を移すことの便ならざるを言う。請うらくは舊に依りて代州に却移せんことを」と。之に従う。

ここでは代北水運院の移轉問題が、水運使からの報告を基に度支によって上奏されており、度支と代北水運使との統屬關係が見て取れるであろう。さらに『李文公集』卷一四「故檢校工部員外郎任君（任信）墓誌銘」には、

#### 〈史料F〉

……度支振武營田使と爲り、試協律郎・攝監察御史たるを得。元和十四年……

とある。直後の一文に見える年代から、任信の營田使在任は元和中のことと推定できる。そしてこの場合、語順から言つて「支度振武營田使」とは決してなりえないのである。後述の如く、代北水運使は營田使も兼任していたと思われるので、任信も水運使であつた可能性が高い。よつて任信の肩書は正しく「度支振武水運・營田使」であつたと考えられる。以上より、史料Dは「度支水運營田使」と見なしてまず誤りないであろう。

ここまでの考察で「代北水運使を度支水運使と表現する場合があった」ことが明らかになったが、實のところ「度支水運使といった場合、それは代北水運使を指す（それ以外の何物でもない）」という逆の命題もまた同時に成り立つ。唐代に設置された漕運關係使職のうち「水運使」を稱したものは本稿で扱った六城水運使・代北水運使以外に、鹽鐵使の兼任にかかる「江淮水陸運使（諸道轉運使の異稱）」および汴東水陸運使・汴西水陸運使・河南水陸運使・陝州水陸運使がある。「江淮水陸運使」は鹽鐵使が兼任している以上、度支管下ということはある得ない。確かに財務分掌制が崩れていた徳宗朝前半には、度支と鹽鐵轉運使が統合され「度支轉運使」という呼稱が登場する場合もあるが、「度支水運使」と稱されることはない。汴東・西水陸運使は實例が貞元初に限られており、貞元二年（七九五）初出の「度支水運使」（前掲史料B）とは時期が重ならない。また河南・陝州水陸運使は貞元八年（七九二）以降、財務分掌制のもと鹽鐵使の管轄下にあったので「度支水運使」に該當しない。一方、六城水運使も貞元十一年以降、大中末の唐持までの間實例は見られないので、やはり排除しうる。そして残るのは代北水運使のみということになる。以上から明らかな如く、度支水運使と代北水運使とは全く同一の使職だったのである。

度支と代北水運使との間には右のような行政上の統屬關係ばかりではなく、監察上のそれもあった。『資治通鑑』卷二三八・元和六年（八一二）四月庚午條には、

或るもの、泗州刺史薛謩の代北水運使と爲り、異馬有るも以て獻ぜざるを告ぐ。事度支に下され、巡官をして往驗せしむ。……

と、度支が水運使の不正を審理・處分していたことが記されている。<sup>(44)</sup> また前掲史料Dの後半部分には、水運使賀拔志による營田虛僞申告問題の顛末が記されているが、このとき取り調べに当たった白行簡は、當時「判度支案」として北邊一體の不正檢舉に当たっていた。<sup>(45)</sup> ここからもやはり代北水運使が度支の監察下にあったことがわかるのである。

以上の考察により、代北水運使が行政あるいは監察いずれの體系の中でも度支管下にあったことが明らかとなった。代

北水運使が朔方節度使によって兼任されていた六城水運使とは全く由來を異にする使職だったということも、いまや明白であろう。六城水運使が物資受け取り側の靈州にあったのに對し、代北水運使が供出側の代州（あるいは振武）に置かれていたのも、それが物資分配の總元締めたる度支の管下にあったという事實に鑑みれば、決して故無きことではなかったのである。財務分掌制によって中國の西北半を統括する度支にとって、北邊防衛のための物資供給は最も樞要な職務の一つであった。これを實地で支えていた代北水運使は、まさに「度支水運使」たるの實質を備えていたと評價できよう。

### （三） 度支系諸司の再編成とその後

ここまで述べてきたとおり、貞元年間には度支管下の常置の官として巡院と代北水運使が設置されたが、前代からの糧料使も廢止されることなく存続していた。またこれ以外に和羅使・營田使といった度支系諸司があって、これらも北邊への物資供給に關わっていたため、都合五官司（巡院・代北水運使・糧料使・和羅使・營田使）が並立する状況となった。本節ではまず貞元以降の糧料使、およびこれまで論及していなかった和羅使・營田使を取り上げ、續いて諸司が徐々に再編成されていく經緯を跡づけてみたい。

糧料使は貞元以後もひきつづき出動軍隊（行營）への物資供給を擔う使職としてしばしば登場する。ただし貞元以降についてはその異稱である「供軍使」という名稱が用いられることが多いようである。<sup>(46)</sup> よって以下では「供軍使」の方で統一することとする。この時期の供軍使に關して重要なのは、前掲史料Bの「度支供軍使」という表現からもわかるように、度支管下の使職であったことがはっきりしてくることである。當初、中央から一臺省官が派遣されるに過ぎなかったものがどの段階で度支の管下に入ったのかを詳かにすることはできないが、度支からもたらされる食出界糧の配分を擔っていた點からすれば、しごく當然の歸結とも言えよう。

和羅使は大曆末に杜佑が任命されたのがその始まりとされるが、<sup>(47)</sup> 北邊では長慶元年（八二一）三月に民を苦しめること

甚だしきを以て廢止されるまで、常置の官であったと思われる。ところがこの間、北邊における和羅使關連の史料は極めて少なく、その官制上の位置づけや職掌を具體的に明らかにすることはできない。ただ長慶元年の廢止以降も臨時の和羅使任命が散發的に行われている點は、後論とも關連するのでここで指摘しておきたい。

最後に營田使についてであるが、ここである營田使とは「度支營田使」、すなわち度支管下のものであって、有力節度使が開元以來の慣習に従って觀察使・支度使等とともに兼任する各道營田使とは別物である。<sup>(52)</sup> 度支營田使の場合、原則として代北水運使によって兼任されていたと思われる。表1より、代北水運使就任者のうち薛審・韓重華・賀拔志が營田使を兼ねていたことがわかるが、それ以外にも間接的にこれを裏づける記録が散見する。例えば『冊府元龜』卷九〇・帝王部赦宥・長慶元年（八二二）七月己酉條には、當時横行していた和羅實施上の不正を檢舉すべく次のような施策が出されている。

#### 〈史料G〉

宜しく度支に委ねて精しく京西北の應ゆる供軍糧、并びに和羅院官、并びに營田・水陸運使を擇びて切に訪察を加え、仍りて條疏を作りて檢轄し、速やかに具して奏聞せしむべし。

供軍糧使とは供軍使、和羅院官とは度支巡院の知院官であろう。ここに見える「并びに」という接續詞の使い方に注目すれば、營田使が水陸運使、すなわち代北水運使によって兼任されていたと解釋する方が自然である。また前掲史料Eで「省司以去營田・發運公事稍遠、遂奏移院振武」、すなわち營田と漕運が代北水運院の「公事」と表現されている點は水運使が營田使を兼任していたという推測を補強する。さらに『冊府元龜』卷四九四・邦計部山澤・大中四年（八五〇）三月條には以下のような記載がある。

#### 〈史料H〉

「大中」四年三月、河・隴を收復するに因りて敕すらく「度支をして溫池の鹽を收管せしめ、仍お靈州分巡院官を差



わして専ら勾當せしめよ」と。是れより先、湖落地（胡落地の誤）は豊州界に在り。河東供軍使收管して毎年鹽を採ること約一萬四千餘石。振武・天德兩軍及び營田・水運官健に供す。是の年、党差（党項の誤）叛擾し、饋運通ぜず。供軍使、河東白池の鹽を榷市して食に供せんことを請う。其れ白池は河東節度使に屬し、度支に繋らざるなり。

ここに見える「振武・天德兩軍及び營田・水運官健」という語も營田業務と漕運業務が密接な關係にあったことを窺わせる。これらを踏まえれば、代北水運使が度支營田使を兼任していたと判斷して大過ないであろう。前節において、元和中に振武營田使であつた任佖が代北水運使を兼ねていた可能性が高いと推測したが（前掲史料F）、それは以上の考察に基づくものである。

ついでに節度使の兼任にかかる各道營田使についても一言觸れておきたい。そもそも營田業務は中央と地方が別個に運營權を有するものであり、律令體制下では中央は司農寺、地方は州・鎮・軍というように擔當官司が決まっていた。<sup>(55)</sup>しかし開元以降、地方における營田を事實上擔っていたのは節度使によって兼任された營田使であり、彼らが實際に營田を開發・運營していた事例も頻見する。<sup>(56)</sup>かかる状況は安史の亂以降も續いていたが、憲宗朝において中央集權化諸政策が成果を擧げるに至り、元和一三年（八一八）、遂に節度使による營田使兼任が度支使兼任とともに禁止されることとなった。<sup>(57)</sup>各道營田使の持つ營田運營權はここで節度使の手を離れ、度支に吸収されることとなったのである。

ここまでの考察を總括すると、貞元年間までに設けられた北邊財政諸司のうち、①和羅使は長慶元年（八二一）三月に廢止され、以後は臨時に置かれるのみ、②度支營田使は代北水運使が兼任、③各道營田使は元和一三年（八一八）に廢止、ということになる。つまり長慶初の段階までに度支系諸司は度支巡院・代北水運使（兼度支營田使）・供軍使の三官司に再編成されていたのである。前掲史料Gは和羅使廢止直後の長慶元年七月に出されたものであるが、ここでは「京西北の應ゆる供軍糧、并びに和羅院官、并びに營田・水陸運使」と、三官司が並記されている。長慶初において度支系諸司が三官司に統合されていたことを端的に示す表現といえよう。

度支系諸司再編成の経過についての考察はしばらく措き、諸司の間にどのような職掌分擔がなされていたのかについて、ここで言及しておきたい。まず前掲史料Gを振り返ってみよう。これは和羅の不正を監視すべく採られた政策であるが、注意すべきは供軍使・知院官・代北水運使すべての精選が命ぜられている点である。換言すれば和羅という一つの業務の監察に、三官司とも何らかの権限を有していたことになり、裏を返せば三官司の職掌區分が不分明であったことを物語る。同様の現象はまた營田にも見られる。元和八年（八一三）、中央政府は北邊における營田政策をめぐって紛糾していた。『舊唐書』卷一六二・潘孟陽傳は當時の状況を次のように傳えている。<sup>(58)</sup>

……〔潘孟陽は〕武元衡と舊有り。元衡相と作るや、復た召して戸部侍郎・判度支と爲し、京北五城營田使を兼ねしめ、和羅使韓重華を以て副と爲す。太府卿王遂、孟陽と不協にして、議して營田の便に非ざるを以い、之を持して下さず。孟陽忿憾して言に形わす。二人俱に對を請い、上怒りて許さず、乃ち孟陽を罷めて左散騎常侍と爲す。

代北水運使韓重華によって前年より始められた北邊營田は、推進派と反対派の間に深刻な對立を引き起こした。そして反対派の急先鋒王遂は當時「西北供軍使」であった。<sup>(60)</sup>營田という一つの業務をめぐって營田使（潘孟陽）・同副使（兼和羅使・代北水運使韓重華）と供軍使（王遂）とが争ったということは、三者がいずれも營田業務に何らかの権限を有していたことを示す。これもまた諸司の職掌が截然と分かれていなかったことを窺わせるものである。

巡院や代北水運使が常置の官として設置された後も、諸司がこのように職掌を重複させつつ並立していたのは何故であろうか。必要に応じて廢置しうる供軍使や長慶以降の和羅使は臨機應變な政策運営に資するところ大であった、とこれを積極的に評價することも確かに可能であろう。しかし、どちらかと言えば官司を統廢合することの困難さという、極めて政治的な要因によるところが大きかったのではあるまいか。複数の官司が同一の職掌に権限を持つことがどれほど非能率であったとしても、それぞれの既得權が一旦形成されてしまえば、その状況を打破するのは餘程の事情がない限り極めて

難しい。度支系諸司が並存していたのも、職掌分擔による截然とした住み分けがなされていたというより、むしろ諸司の關係を明確にしないまま既成事實のみが先送りされた状態と理解すべきであろう。<sup>(61)</sup> 確かに最終的には營田使は代北水運使に事實上吸収され、和羅使は廢止されるなど、多少の統廢合は見られた。前者の場合その背景を明らかにすることはできないが、後者については奇烈な收奪という、既得權擁護論を乗り越えるに足るだけの動機があったために斷行しえたのであろう。しかし残る巡院・代北水運使・供軍使は、その後も職掌區分を明らかにせぬまま並存し續けていくのである。<sup>(62)</sup>

以上、貞元以降における度支系諸司の設置・再編成の経緯を論じてきたが、これら諸司の持つ財政上の意義は、北邊への物資供給業務の運営權を中央の手に復すということに他ならない。そして元和一三年（八一八）に實施された節度使の支度使・營田使兼任禁止は、北邊における財政運営に關して言えば、度支系諸司によるイニシアティヴを決定づけた政策と評價できるのである。<sup>(63)</sup>

最後に北邊財務運営體制がその後たどった経過を跡づけておきたい。

まず長慶年間には度支司から戸部司への和羅業務移管という大きな變化が起こった。<sup>(64)</sup> 當初、戸部司の中で専門の統括者ないし部局が置かれた様子は見られないが、會昌年間までには「戸部巡官」が「和羅巡官」の肩書を有し、和羅を主掌するようになったようである。<sup>(65)</sup> いっぽう地方の組織はこれにどう對應したのであろうか。それまで度支の地方出先機關として和羅を擔ってきたのは、前述の如く巡院である。中央の和羅業務が戸部司へ移管された以上、巡院もこれと並行して戸部司へ横滑りしたと考えるのが妥當であろう。<sup>(66)</sup> ただし前掲史料Hに見える「靈州分巡院」のように依然として度支管下に留まったものもあるので、戸部へ移されたのはその一部と思われる。<sup>(67)</sup> 要するに、中央では戸部和羅巡官が和羅を統括し、地方での實務は戸部巡院が行うようになったと考えられるのである。<sup>(68)</sup>

會昌年間になると、キルギスに逐われた回鶻が代北に侵入したため、北邊財務運営を擔う三官司の一角、代北水運使の

機能が一時麻痺した。時の宰相李德裕はこうした事態を承け、麟州・勝州間の富谷という土地で和羅を實施するよう次のように上奏した。

訪聞すらく、麟・勝兩州の間、地、富谷と名づくるは、人至って殷繁にして蓋藏甚だ實つ、と。望むらくは度支をして幹事有才の人を揀びて和羅使に充て、秋收に及ばば此に就きて和羅して所在において貯蓄し、且らく和羅を以て名と爲し、兼ねて節度使と潜かに計會設備し、如し萬一振武通ぜざれば、便ち天德軍運糧使に改められんことを。勝州は河を隔てて東受降城を去ること十里、東受降城より振武に至るまでは一百三十里。此の路に糧有らば、東は以て振武を壯んにすべく、西は以て天德を救うべし。……

『會昌一品集』卷一四「條疏邊上事宜狀」に收められたこの一條は、黄河左岸の代北地方に回鶻が侵入したため、右岸の富谷に軍糧供給據點を設け、有事には和羅使を運糧使に編成替えして輸送を行わせることを求めたものである。これが裁可されたか否かは判然としない。しかし本來代北水運使が擔うべき振武―天德間の漕運をわざわざ別の使職を設けて實施しようとしている以上、代北水運使が機能麻痺の危機に瀕していた可能性は高いと言えよう。

そしてこれ以降、代北水運使に昔日の面影は戻らなかった。それを裏づけるように大中五年（八五二）ないし六年には馬曙という人物が「度支河東・振武・天德等道營田・供軍使」に任命されている。<sup>(69)</sup>「河東供軍使」は前掲史料Hにも見え、そこには大中四年（八五〇）以前より胡落池鹽の生産を擔っていたとあるから、臨時に設けられた使職とは考えにくい。また河東・振武・天德は本來代北水運使の管轄地域であり、營田使は前述の如く代北水運使が兼ねるべき使職である。同じ地域で、しかも類似的の職掌を擔う別使職が新設されたという事實は、代北水運使がもはやその役割を十全に果たし得なくなっていたことを示唆していよう。さらに大中末には朔方節度使唐持が靈武六城轉運使に任命されている（表1）。河東・代北からの物資輸送路が麻痺したため、關内道中部から靈武に至る搬運路が天德・三受降城方面へ擴大されたものと思われる。このうち代北水運使の管轄地域は文字どおりの代北、すなわち大同盆地附近に限定されてしまったのである。

「代北水運使」という名稱が定着するのも、前節で述べたようにこの時期と推定される。

僖宗朝になると代北水運使は大同軍防禦使（雲州防禦使）によって兼任されるようになる（表1の支讓・段文楚の欄参照<sup>(70)</sup>）。

これは代北水運使の管轄地域が大同軍という一藩道に限られるようになったことを示すとともに、代北水運使が度支の管轄下より離れたことも意味する。度支による北邊財政運営はもはや崩壊の危機に逢着していたのである。

乾符五年（八七八）、最後の代北水運使段文楚は年來の飢饉にも関わらず衣食の供給を削減したため、將兵の不満を買った。當時代北で急速に成長し、さらなる勢力拡大を目論んでいた沙陀族は、これに乗じて反亂を起こした<sup>(71)</sup>。このうち北邊は唐末五代へと至る戰亂時代に突入し、度支による北邊財政運営もここに至って完全に崩壊するのである。

### 三 北邊漕運體制の變遷

ここまでは唐代後半の北邊財務運営について官制を中心に論じてきたが、本章では北邊での漕運業務が實際どのようなように運営されていたのかについて考察を進めていきたい。

邊境への物資輸送の實態に關しては、大津透氏・荒川正晴氏によって様々なことが明らかにされている<sup>(72)</sup>。それに據れば、將兵の衣料・給與および和羅の支拂いに充てられる布帛の輸送法は七世紀から八世紀初の間に、徭役から「和雇送達」そして「僦勾客運」へという變化を辿ったという。「和雇送達」とは官が輸送に當たる綱丁を直接雇傭し監督する方法であり、「僦勾客運」とは官は監督せず客商に輸送を請け負わせることである<sup>(73)</sup>。唐内地において開元年間までに「僦勾客運」が一般化していたことはすでに菊池英夫氏により明らかにされていたが、兩氏の研究はそれを出土文書という一次史料で裏づけ、「役↓雇傭↓客商による請負」という漕運運営變遷の圖式をより説得的なものとしたという點で、極めて注目される。

ところで宮澤知之氏はこうした變遷を「北邊への物流體制が改められ」る過程と捉え、「唐後半期は軍事物資の調達を

起動力とする商人による全國的物流が低水準ではあるが組織されつつある時代とみることができる」とさえ述べられている。<sup>(75)</sup>しかし果たして北邊における客商の活動にそこまでの評價を下しうるものであろうか。氏の言われる「北邊」が敦煌を中心とする所謂西域に限定されるものであるとすれば、荒川氏等によって證明済みであり、問題はない。しかしそれを本稿で扱う「北邊」にまで敷衍するとなると、いささか躊躇を覚える。菊池氏が僞勾客運の一般化していく過程を明らかにしたのは、實は大運河と河北向けの漕運のみで、その他の地域には論及されていない。よって「北邊」についてはまた別に考えていく必要があるのである。

律令體制下の北邊漕運が徭役原則であったことは他地域と同様である。敦煌發見・開元二五年水部式殘卷(P.250v)六二・六六行目には、徭役による水手徵發の規定が見える。<sup>(76)</sup>

勝州の轉運水手一百廿人は、均しく晉・絳兩州より出し、勳官を取りて充て、足らざれば兼ねて白丁を取り、並びに二年にして替を與う。其の勳官は毎年勳一轉を賜り、絹三疋・布一端を賜るに、當州の應に京に入るべき錢物を以て充つ。其の白丁の充てらるる者は應に課役及び資助を免るべきこと、並びに海運水手の例に准ず。代わるを願わざる者は之を聽す。

この一條が開元二五年式で初めて加えられたものという保證はないから、開元二五年當時の實狀がそのまま反映されているとは言いが切れない。ただ唐代前半のある時期まで漕運が徭役によって運営されていたこと、そしてその原則が開元二五年まで少なくとも規定上堅持されていたことは確かである。

では北邊において徭役體制が崩壊したのはいつごろであらうか。安史の亂をはさむ八世紀半ばから後半にかけての記録がまったく残っていないため、徭役崩壊から水手雇傭化への移行過程を具さに跡づけることは遺憾ながら困難である。しかし結果として雇傭に轉換していったことは、やや時代は下るが貞元年間<sup>(77)</sup>の史料により確かめられる。前掲史料Cの該當部分を再び挙げよう。

勇壯且つ弓矢に便なる者を募りて榜夫と爲すこと千有餘人、尺籍伍符に隸し、制は舟師の如し。

貞元後半までに水手の雇傭が行われていたことはこれより明らかであろう。また『韓昌黎集』卷二一「送水陸運使韓侍御歸所治序」は、元和六年（八一二）から八年頃の北邊の状況を次のように傳えている。

吾以爲えらく、邊軍は皆耕作を知らず、口を開きて哺を望む。有司常に人を僦いて、車船を以て他郡より往輸するに、沙に乗り河を逆ること、遠き者は數千里なり。人畜は死し蹄踵は道に交わり、費は勝げて計るべからず。中國は坐耗して邊吏は恆に食の繼がざるに苦しむ。

やはり雇傭によって水手を確保していたことがわかる。さらに史料Cで榜夫が「尺籍伍符」すなわち兵籍に附されていたと述べ、また『韓昌黎集』で「邊軍不知耕作」と言っていることから、この水手は「官健」であったと考えてよからう。北邊漕運の擔い手がその後も引き續き官健であったことは、北邊胡落池産の鹽を「河東・天德兩軍及び營田・水運官健に供」していたという大中年間（913-926）の記録（前掲史料H）からも認めうる。北邊の漕運が官健によって擔われていたとすれば、水手の雇傭と輸送の監督とともに官が直接行っていたことになる。これは一應「和雇送達」と判斷して差し支えないであろう。ただし戦闘要員を用いているという點では、他地域の「和雇送達」とやや性格が異なると言わねばなるまい。またこの他に雇傭費用の財源においても、他地域との相違が見られた。官健の雇傭費用は、衣賜については江淮より上供される布帛、穀物については兩稅斛斗分・屯田收穫物・和羅粟のいずれかよりまかなわれたと思われる<sup>(78)</sup>。これに對し他地域では、大運河を例に取れば、大雜把に言つて安史の亂以前は脚直（徭役に代人差出を認め、その代償に州縣が徵收する代人維持費用）、劉晏による鹽政改革が行われて以後は鹽利に依據していた<sup>(79)</sup>。つまり同じ「和雇送達」とは言つても、北邊の場合、その構成員の範疇と雇傭費用の財源という二點で他地域とは違ひが見られたのである。

ではこの後「僦勾客運」への展開は見られたのであろうか。關内道中部から京師周邊にかけての地方では、商人が比較的容易に行き來して穀物を賣買していた形跡が認められる。例えば大和八年（八三四）八月戊申には近京の豐作地域にお

ける商人の商業活動を許し、彼らの往來を妨害してはならないとする詔が出されている<sup>(80)</sup>。また大中六年（八五二）五月の敕に據れば、京畿および「西北邊」が豊作となったにも関わらず、餘剩米を京畿の民が一齊に長安に持ち込み不當に貯め込んだため、邊塞での穀物價格が逆に高騰したという<sup>(81)</sup>。商人の活動が次第に活潑化していく様子が確かに窺えるが、これらはいくまで客商たちの私的な商業活動に關する記事であり、官からの委託によって物資供給を請け負う「僦勾客運」とただちに結びつけることはできない。一方、河東においては『新唐書』卷一四八・史憲忠傳に、

大中の初め、突厥河東を擾し、漕米・行賈を鈔む<sup>(82)</sup>。

とあり、漕運に携わる客商の存在が示唆されている。しかし前掲史料Hより明らかな如く、大中年間のこの地方では官健が漕運を擔っていた。よってここに現れる「行賈」が漕運全般の請負を行っていたとは思われない。彼らが漕運業務に何らかの形で関わっていたことはおそらく間違いないが、「僦勾客運」と呼べるほどの役割を果たしていたとは言えないであらう<sup>(83)</sup>。

以上を總括すれば、北邊漕運はおおむね貞元年間までには所謂「和雇送達」段階に達したが、その擔い手と雇傭費財源の面で他地域とは異なっていた。そしてその後「僦勾客運」への展開をはっきりと認めることはできないのである。北邊の漕運では「徭役↓和雇送達↓僦勾客運」の圖式が無條件に適用し得ないということをここで強調しておきたい。

#### 四 結びに代えて——代北水運使の歴史的意義——

以上、唐代後半の北邊における度支系諸司設置の經緯を跡づけ、またこの間に起こった漕運の變化について論じた。開元二五年（七三七）前後に設置された六城水運使は北邊における漕運業務を擔っていたが、安史の亂以後その實質を失い、これに代わって糧料使が度支から支給される物資の配分に當った。しかし糧料使はいくまで臨時の官であった。貞元年間に吐蕃の侵入が激化すると、中央財政の統括者にまで成長していた度支は、常置の地方出先機關として巡院・代北水運



使を創設し、物資供給業務の運営権を強化した。その後、代北水運使による度支營田使の兼任、節度使による各道營田使兼任の禁止、和羅使の廢止を経て、長慶中には度支巡院・代北水運使・供軍使という三官司による體制が確立した。その後和羅業務が戸部司へ移管されると、戸部司は中央では戸部和羅巡官という主掌官を置き、地方出先機關の巡院も一部傘下に収めた。代北水運使は會昌の回鶻侵入で一時機能麻痺に陥るとその後は次第に管轄地域を縮小させ、最後は文字どおり代北地方を治めるに過ぎなくなった。一方、北邊における漕運は、律令體制下では徭役で徵發される水手が擔っていたが、代北水運使が設置された貞元後半頃までには水手を雇傭する體制、所謂「和雇送達」段階に達した。ただ水手が戦闘要員たる官健である點、そして雇傭費の財源の點でも他地域とは異質な「和雇送達」が展開された。またその後も「徭勾客運」に結びつくような客商の活動は見られず、ここに北邊の漕運の特異性を見出すことができるのである。

最後に、本稿で取り上げた度支系諸司、特に代北水運使の持つ歴史的意義について私見を述べておきたい。『職官分紀』卷四七・諸路轉運使副使判官の項には轉運使の沿革が概述されているが、そこに次のような記載が見える。

諸道に巡院を分置し、皆、使に統べらる。五代巡院を罷め、始めて轉運使を置く。

この史料は宋代の監司、とりわけ路轉運使の形成過程を示すものとして、これまでも注目されてきた。<sup>(84)</sup> 室永芳三氏は五代の北面轉運使に注目し、これを唐代の巡院を受け継ぎ、宋代の路轉運使へと繼承されるものであると推測された。さて、そこで本稿で扱った代北水運使を振り返れば、度支管下にあった點、また複数の道州を管下に収めて地域限定的に、しかも營田など漕運以外にも多様な財務運営を行っていた點など、宋代の路轉運使と共通する部分がやはり多い。したがって代北水運使もまた右の系譜に連なるものと考え得るのではあるまいか。確かに代北水運使と巡院とは同時期に並存しているので、前者が後者を「繼承した」官司とは言えないであろう。しかし度支管下において一地方の財務運営を行っていたという點では兩者同じ系列に屬すると言える。更に踏み込んで言えば、北邊における巡院設置の數年後、貞元一〇年（七九四）頃に設置された代北水運使は「水運院」と稱される如く（前掲史料A・E）使院を備えた使職であり、これを巡院よ

り派生した一類型と捉えることも断定まではしかねるところだが、可能ではある。<sup>(85)</sup>ただ少なくとも代北水運使に宋代の路轉運使の初源的性格を見出すことは充分可能であろう。

一方、糧料使については、第五琦の糧料使就任を伝える『資治通鑑』卷二二三・代宗廣德元年（七六三）一〇月條の胡注に次のような説明がある。

糧料使は行營に軍食を給するを主る。我が宋朝の隨軍轉運使は即ち其の任なり。

糧料使は行營への供給を行うという點で、宋代の隨軍轉運使に連なるとされる。<sup>(86)</sup>以上を總合すれば、本稿で扱った度支系諸司のうち、「院」を備えた本格的官司である巡院・代北水運使は宋代の路轉運使に繼承され、臨時に置かれる糧料使（供軍使）は宋代の隨軍轉運使に繼承される、という圖式が明らかとなるのである。

「はじめに」でも述べた如く、度支系諸司の整備は唐代後半の北邊統治を支える兩輪の一方である。車輪のもう一方、すなわち北邊における穀物自給の確立については、本稿で明らかになった點を踏まえ、稿を改めて論ずることとしたい。

## 註

- (1) 大澤正昭「唐宋・五代政治史研究への一視點」（『東洋史研究』三一—四、一九七三）、同「唐末藩鎮の軍構成に關する一考察」（『史林』五八—六、一九七五）。

- (2) 前註(1)大澤論文。

- (3) 松井秀一「盧龍藩鎮攷」（『史學雜誌』六八—一二、一九五九）、堀敏一「魏博天雄軍の歴史」（『中國古代史の視點』汲古書院、一九九四）、谷川道雄「河朔三鎮における節度使權力の性格」（『名古屋大學文學部研究論集』七四、一九七八）、同

「河朔三鎮における藩帥の承繼について」（『栗原益男先生古稀記念論集 中國の法と社會』汲古書院、一九八八）、鳥谷弘昭「吳—南唐朝の兵力基盤に關する一考察」（『歴史における民衆と文化—酒井忠夫先生古稀祝賀記念論集—』國書刊行會、一九八二）、同「南唐の文治主義について」（『立正史學』五九、一九八六）、伊藤宏明「唐末五代期における江西地域の在地勢力について」（『川勝義雄・礪波護編『中國貴族制社會の研究』京都大學人文科學研究所、一九八七）、渡邊孝「魏

博と成徳—河朔三鎮の權力構造についての再検討—」(東洋史研究五四—二、一九九五)。また後註(8)に挙げる佐竹靖彦氏の諸論文も参照。

- (4) 大澤正昭「唐末の藩鎮と中央權力」(東洋史研究三二—二、一九七三)、辻正博「唐朝の對藩鎮政策について—河南「順地」化のプロセス—」(東洋史研究四六—二、一九八七)、張國剛「唐代藩鎮類型」(『唐代藩鎮研究』湖南教育出版社、一九八七)、王援朝「唐代藩鎮分類叢議」(『唐史論叢』(五))三秦出版社、一九九〇、Denis Twitchett, "Varied Patterns of Provincial Autonomy in the Tang Dynasty", in J. perrey & B. Smith(eds), *Essays on T'ang Society*, E. J. Brill (Leiden), 1976.

- (5) 「抑藩振朝策」に關わる論考は數多いが、差し當たり「藩鎮時代の州稅三分制について」(史學雜誌六五—七、一九五六)、「藩鎮體制下における唐の振興と兩稅上供」(東洋學報四〇—三、一九五七)を参照。いずれも『日野開三郎東洋史學論集』第四卷(三一書房、一九八二)・第二部「兩稅法の運営と效果」に再録されている。

- (6) 妹尾達彦「唐代後半期における江淮鹽稅機關の立地と機能」(史學雜誌九二—二、一九八二)、同「唐代河東池鹽の生産と流通—河東鹽稅機關の立地と機能—」(史林六五—六、一九八二)。また高橋繼男氏の巡院關係の諸論考を参照(高橋論文については以下で逐次挙げていく)。なお漕運・專賣制に關する先行研究は膨大な數に上るのでここでは列挙しない。

- (7) 大津透「唐律令國家の豫算について—儀鳳三年度支奏抄・四年金部旨符試釋—」(史學雜誌九五—二、一九八六)、同「唐儀鳳三年度支奏抄・四年金部旨符補考—唐朝の軍事と財政—」(東洋史研究四九—二、一九九〇)、荒川正晴「唐河西以西の傳馬坊と長行坊」(東洋學報七〇—三・四、一九八九)、同「西域出土文書に見える函馬について(上)(下)」(吐魯番出土文物研究會會報四〇・四一、一九九〇)、同「唐の對西域布帛輸送と客商の活動について」(東洋學報七二—三・四、一九九二)、同「唐代驛傳制度的構造とその運用(上)(下)」(吐魯番出土文物研究會會報七八・八三、一九九二)、同「中央アジア地域における唐の交通運用について」(東洋史研究五二—二、一九九三)、同「トウルファン出土漢文文書に見えるEggarについて」(内陸アジア言語の研究Ⅳ、一九九四)、同「唐代コータン地域のEggarについて」(龍谷史壇一〇三・一〇四、一九九四)。同「北庭都護府の輪臺縣と長行坊」(『小田義久先生還曆記念東洋史論叢』、一九九五)。
- (8) 北邊に觸れている研究としては、財政では青山定雄「唐代の屯田と營田」(史學雜誌六三—一、一九五四)、鈴木正「唐代の和羅に就いて(一)(二)」(歷史學研究七七・七八、一九四〇)、菊野恭子「唐代の和羅」(お茶の水史學一、一九五八)が挙げられるが、いずれも一九六〇年以前のものである。また兵制では王永興「唐代前期西北軍事研究」(唐研究基金會叢書、中國社會科學出版社出版、一九九四)がある。これに對し、河北については河朔三鎮關係の諸論文、江南に關しては佐竹靖彦「杭州八郡から吳越王朝へ」「唐宋變革

期における江南東西路の土地所有と土地政策―義門の成長を手がかりに」(以上『唐宋變革の地域的研究』同朋舎出版、一九九〇、第三部所収)、前註(3)鳥谷・伊藤論文、四川については佐竹「唐代四川地域の變貌とその特質」「王蜀政權成立の前提について」「王蜀政權小史」「唐宋變革期における四川成都府路地域社會の變貌について」(以上『唐宋變革の地域的研究』、第Ⅳ部所収)等がある。なお河朔三鎮關係の諸論文に關しては渡邊孝氏が前註(3)論文註(8)(9)においてまとめられてるので参照されたい。また漕運關係・專賣關係の諸論文も、江南に關するものと言えるが、本文でも述べる如く地域性に關する自覺的な配慮がなされているとは言い難い。

(9) 「北邊」に近似する史料用語として「京西・京北」という表現がある。「京西・京北」が具體的にどの地域を指すのかについては、『資治通鑑』卷二三九・元和七年末の李絳上言の胡注に次のように説明している。

京西、鳳翔・秦・隴・原・涇・渭也。京北、邠・寧・丹・延・鄜・坊・慶・靈・鹽・夏・綏・銀・宥也。

しかしこれは必ずしも嚴密な行政區畫に基づいた定義ではあるまい。というのも、ここでは除外されているオルドス北縁の天德・振武軍あたりを「京北」に含める場合があるからである。元和半ばに潘孟陽が「京北五城營田使」に任命されているのはその一例である(『舊唐書』卷一五)。本稿で中心的に論ずるオルドス北縁地方が「京北」に包まれるか否かが不確定である以上、この語はやや使用しにくい。よって本稿で

は、オルドス北縁地方も、また京師以北オルドス以南の地域(胡注で言うところの京西京北地域)も包含する概念として「北邊」の語を用いたい。

(10) 北邊における穀物の地域内自給については「唐代後半の北邊における軍糧政策(假題)」と題する論考を準備している。

(11) 本墓誌銘は周紹良主編『唐代墓誌彙編』(上海古籍出版社、一九九二)下・天寶一七九(一六五六頁)にも收められている。

(12) 吳廷燮『唐方鎮年表』卷一・朔方節度使。

(13) 本條が開元二五年式で初めて加えられたとは限らず、またこの時點で式の規定に實効性があつたという保證はないから、これが開元二五年の狀況を忠實に反映しているとは言切れない。しかし開元二五年から遠くないある時期まで勝州に北邊漕運の據點があつたことは少なくとも確實であろう。

(14) 『唐會要』卷八七・陝州水陸運使條。

(15) 「五城」「六城」の比定に關する主な説として、通鑑胡注および岑仲勉・嚴耕望兩氏の説を擧げておく。まず胡三省は「當初三受降城・豐安・定遠・振武を六城としていたが、振武軍が節度使に昇格して朔方より分出されると三受降城が振武軍へ移管されたため、豐安・定遠・新昌・豐寧・保寧を以て五城とした」とする(『資治通鑑』卷二一八・至德元載六月および卷二二五・大曆十一年二月辛巳條胡注)。一方、岑氏説によれば「五城とは三受降城・豐安・定遠であり、六城と言つた場合オルドス中部に設置された榆多勒城が加わる」という(『唐史餘藩』卷二・玄宗「朔方節度下之五城六城」

上海戸籍出版社、一九六〇）。そして嚴氏は基本的に岑氏の説を踏襲しつつ、六城目としては振武軍も加わりうるとされた（中央研究院歴史語言研究所專刊之八十三『唐代交通圖考』第一卷、京都關内區、二二二頁）。今、各説を逐一検討する紙幅はないので、私見を要點のみ述べておく。『冊府元龜』卷九九二・外臣部備禦・大曆八年條の元載上奏には「稍やありて〔對吐蕃防衛軍の一部を〕鳴沙縣・豐安軍に置きて之が羽翼と爲し、北のかた靈武五城を帶して之が形勢と爲さしめ、……」というように「五城」と「豐安軍」を別個に扱う表現が見られる。従って豐安は「六城目」と考えられる。そして「五城」は三受降城・定遠に振武軍を加えるのが最も妥當であらう。

(16) 『舊唐書』卷一九〇中・孫逖傳に據れば、彼は開元二四年に中書舍人に就任したのち、父孫嘉之の喪に服するため一旦辭職するが、喪が明けた開元二九年に中書舍人に復職し、その年のうちに河東黜陟使に移ったという。彼が父のために撰した墓誌より、孫嘉之は開元二七年四月二四日に死去したことがわかるので（『文苑英華』卷九五五・孫逖「宋州司馬先府君墓誌銘」、孫逖の中書舍人在任期間は最初が開元二四年から二七年四月前後まで、二度目が二九年となる）。

(17) 吳廷燮『唐方鎮年表』卷一・朔方節度使及び卷八・河西節度使。

(18) 就任年次は『舊唐書』卷一〇三・牛仙客傳、離任年次は『舊唐書』卷九・玄宗本紀下に據る。なお『唐會要』卷七八・諸司中・節度使・朔方節度使條は開元二〇年就任とする

が誤りであらう。

(19) 『舊唐書』卷一一五・『新唐書』卷一四一の本傳は「朔方水陸轉運副使」とする一方で、『新唐書』卷六・肅宗本紀・天寶一五載六月辛丑條や『資治通鑑』卷二二八・至德元載六月條は「六城水陸運使」、『舊唐書』卷一〇八・『新唐書』卷一二六・杜鴻漸傳や『冊府元龜』卷三七三・將帥部忠四・杜鴻漸條は「六城水運使」としている。「六城水運副使」という表現はどこにも見えないが、六城水運使を朔方節度使が兼任するという原則に照らせば、魏少遊は副使と考えるべきであらう。

(20) 『舊唐書』卷一九四・『新唐書』卷二一五・突厥傳および『舊唐書』卷一九六・『新唐書』卷二二六・吐蕃傳參照。

(21) 肅宗が靈州に蒙塵した際、これを出迎えた魏少遊は、前註(19)でも述べたように六城水運副使であった。副使が存在する以上、判官以下の下部組織も備わっていたと考えるべきであらう。

(22) 吳廷燮『唐方鎮年表』卷一より肅宗・代宗期の朔方節度使就任者を挙げれば、郭子儀（至德元載～乾元二年、寶應元年、廣德二年～大曆一四年）、李光弼（乾元二年～上元二年）、李國貞（上元二年～寶應元年）、僕固懷恩（寶應元年～廣德元年）である。

(23) 室永芳三「五代節度使府の糧料使について」（東方學二、一九六一）。

(24) 陳少遊については『舊唐書』卷一二六・『新唐書』卷二二四上の本傳、路嗣恭については『資治通鑑』卷二二四・永泰

元年閏一〇月乙巳條。またやや時代は下るが、大曆中には于頔が河東租庸・糧料・鹽鐵等使となり（『冊府元龜』卷七二九）、貞元八年には鄭克鈞が靈夏二州運糧使に就任している（『冊府元龜』卷四八四）。

(25) 後に度支の下部機關として地方財政を管掌することになる巡院はこの時期までに北邊に設置されていたとは考えられないから、それ以外に可能性のある官司としては糧料使、そして租庸使が挙げられる。糧料使はあくまで行營向けに設置される臨時的な使職であるから、こうした定期的・定額的漕運を擔う官司に該當するとは思われない。一方、租庸使は上元中に劉晏によって地方に派遣された使職であり、後に度支ないし鹽鐵轉運使の地方出先機關として發展した巡院の前身であるという（高橋繼男「劉晏巡院設置について」集刊東洋學二八、一九七二）。巡院が漕運を擔っていたことは高橋氏により明らかにされているから（『唐後半期における巡院と漕運』東洋大學文學部紀要第三六集・史學科篇Ⅷ、一九八二）、その前身たる租庸使も同様であったとの假定は成り立ちうるが、もとより確證はない。

また、物資の受取側たる六城水運使が副使以下の下部機關を派遣して輸送を行っていた可能性もあるが、史料に見える執行主體はあくまで度支であり、度支と統屬關係のない六城水運使が實務を擔ったと考えるのはやはり難しいであろう。また本文でも述べたとおり、この時期の六城水運使の實務機能が疑問視される點も、六城水運使説の桎梏となる。

(26) 日野開三郎「大曆末以前の度支使」（『日野開三郎東洋史學

論集』第三卷、三一書房、一九八一）

(27) 『舊唐書』卷一九六・『新唐書』卷二一六・吐蕃傳。

(28) 高橋繼男「唐後半期に於ける度支使・鹽鐵使系巡院の設置について」（集刊東洋學三〇、一九七三）。

(29) 『陸宣公翰苑集』卷一八「請減京東水運收脚價於沿邊諸州鎮儲蓄軍糧事宜狀」。この上奏文は『資治通鑑』では貞元八年八月に繫年されている（卷二三四）。

(30) 『資治通鑑』卷二二六・建中元年七月己丑條、諸道各置知院官、每旬月、具州縣雨雪豐歉之狀白使司、豐則貴糶、歉則賤糶、或以穀易雜貨供官用、及於豐處賣之。知院官始見不稔之端、先申、至某月須如干蠲免、某月須如干救助、及期、晏不俟州縣申請、即奏行之、應民之急、未嘗失時、不待其困弊・流亡・餓殍、然後賑之也。

(31) 『陸宣公翰苑集』卷二〇「請邊城貯備米粟等狀」。文中には、貞元八年以來二年間の通算和糶額が報告されている。よってこの上奏文が提出されたのは貞元九年末ないし一〇年ということになる。

(32) 巡院の監察機能に關しては、高橋繼男「唐代後半期における巡院の地方行政監察業務について」（『星博士退官記念中國史論集』、一九七八）を參照。

(33) 『冊府元龜』卷九〇・帝王部赦宥・長慶元年七月己酉條（後揭史料G）に「和糶院官」という表現が見られる。

(34) 前註（8）青山論文。

(35) 本表について觸れておくべきことが二點ある。まず李懷光

の繫年について。『冊府元龜』卷一七六・帝王部姑息の該當記事は、通行の明刊本では直前記事が貞元元年になっているため、一見貞元元年二月甲子條のようである。しかしこの直前記事は實のところ更に一つ前の興元元年正月條の後日談であり、ここで段落を區切った明刊本は誤りである。(宋本は一續きの記事として扱っている)従って本條も興元元年二月甲子とするのが正しい。このことは本條の後に改めて貞元元年の記事が見えることから明らかである。

また、代北水運使初例の薛審について。後掲史料Cでは「京兆」水運使としているが、これは明らかに誤りである。治所が「雁門」即ち代州にあったことから「京兆」水運使と改めた。青山氏も同様に校訂している(前註(8)青山論文・四一頁)。また次の韓重華の官名から考えれば「京西」水運使となる可能性もある。「兆」を「西」と錯誤することも、字體としては十分起こりうるであろう。

(36) 六城水運使廢止を示す可能性のある史料としては『冊府元龜』卷四九八・邦計部漕運・貞元二年(七八六)正月條の次の記事がある。

……諸道水陸運使及度支巡院・江淮轉運等使、宜並停。

……  
ここでいう「諸道水陸運使」に六城水運使が含まれているとすれば、この時点で廢止された可能性が考えられる。ところが同じ記事を伝える『資治通鑑』卷二二二・同年同月條によれば、この詔は宰相崔造・元琇が前年に江淮轉運使に就任した韓滉に對抗し、漕運運營權の中央回復を圖って發布したも

のであり、結局成功しなかったという。またこのち度支巡院・江淮轉運使が廢止された形跡はなく、「諸道水運使」に含まれると思われる河南北水陸運使も引き續き任命事例が見える(『唐會要』卷八七・河南北水陸運使)。つまりこの詔そのものの实效性が疑問視されるわけである。したがってこの詔を以て六城水運使が廢止されたとは斷定しきれないのである。

(37) 『資治通鑑』卷二四九・大中九年五月條に、宣宗が韋澳に命じて密かに作らせた「處分語」という書物により、地方の事情によく通じていたことを示すエピソードが載せられている。この「處分語」が『諸道山河地名要略』の別稱であることは、『新唐書』卷五八・藝文志二・乙部史錄・地理類および『宋史』卷二〇四・藝文志三・史類・地理類より確かめられる。詳細な考證は王仲荦著・鄭宜秀整理『敦煌石室地志殘卷考釋』(上海古籍出版社、一九九三)九〇頁以下を参照。

(38) 『冊府元龜』卷五一〇・邦計部交結・薛審條は「代北營田・水運使」となっているが、地の文なので後世の適及的表現と考えうる。

(39) 前註(10)拙論参照。

(40) 薛審の在任時期については若干考證を要する。『資治通鑑』卷二三八・元和六年四月庚午條には、

或告泗州刺史薛審爲代北水運使、有異馬不以獻。  
とあり、薛審がこのとき泗州刺史より代北水運使に移ったように述べられている。ところが『新唐書』卷一五九・盧坦傳には、

或告泗州刺史薛審爲代北水運時、畜異馬不以獻。

とあり、反對に代北水運使在任は泗州刺史就任以前であるように書かれている。「時」一字の有無で官歴が正反對になつてしまふわけだが、これは後者の方が正しい。というのは『冊府元龜』卷五一〇・邦計部交結・薛審條に、

薛審、貞元末爲代北營田水運使、善畜牧、有良馬時、以路朝權及中貴人。時中官薛盈珍有勤力、於元和初、審以族人附進、盈珍頗延譽以助之。故自泗州刺史、遷福建觀察使。

という記述があり、代北水運使から泗州刺史へ轉任したことは明白だからである。これに基づいて通鑑の文に「時」字を補うと、元和六年四月の段階では既に泗州刺史となつていたことになる。したがって薛審の在任時期の下限は元和六年より前に設定しなければならない。また上限は右の『冊府元龜』の記事より貞元末である。ところで『韓昌黎集』卷二「送水陸運使韓侍御歸所治序」の五百家註では、元和六年四月の時点で薛審は代北水運使に在任中であつたとする通鑑の記述に基づき、同年冬に水運使となつた韓重華は薛審の後任であるとの解釋がなされている。しかし右の結論が正しいとすれば、薛審は元和六年四月以前に泗州刺史に轉任してゐたはずであるから、これは誤りということになる。

(41) 通行の明刊本は「度支水邊營田使」に作っているが、宋本に據つて「水運」に改めた。また「度支」の方は宋本そのままである。

(42) 嚴耕望撰『唐僕尚丞郎表』卷一四「諸道鹽鐵轉運等使」參照。

(43) 度支と鹽鐵轉運使による財務分掌は建中元年より一時停止していたが、貞元八年に復活し、以後唐末まで續いた。『唐會要』卷八四・兩稅使・貞元八年四月條に據れば、東渭橋以東が鹽鐵使の管轄であつたことがわかるので、河南・陝州兩水陸運使も鹽鐵使の管轄下であつたと思われる。前註(28)高橋論文參照。なお會要のこの記事が建中三年と貞元七年の記事の間にあり、一見「建中八年」のように見えるがこれは誤りであること、高橋氏の指摘の通りである(高橋論文註①)。ちなみに河南・陝州兩水陸運使は元和六年(八一)まで存続した(『舊唐書』卷一四・憲宗本紀二元和六年一〇月己巳條)。

(44) 前註(40)でも述べたように、この記事は嚴密には「泗州刺史薛審爲代北水運使時」としなければならない。またここで取り調べを實際に行っている巡官は、次節で述べるように使職關係の僚佐のひとつであり、巡院とは直接關係はない。

(45) 『唐會要』卷五九・度支員外郎・長慶三年(八二三)二月條、

長慶三年十二月、度支奏「主客員外郎・判度支案自行簡、前以當司判案郎官・刑部郎中韋詞、近差使京西勾當和羅、遂請自行簡案。今韋詞却回、其自行簡合歸本司。伏以判案郎官比有六人、近或止四員。伏請更置郎官一員判案、留自行簡充。敕旨依奏。

判度支案とは、財政肥大化によって度支の業務が繁多になつたのにもない、尙書戸部の一曹に過ぎない度支のスタッフを補充すべく、他司より派遣される郎官クラスの官員を言



う。ここで登場する白行簡の本官は主客員外郎である。『通典』卷二三・職官典五・戸部郎中に見える建中三年正月の杜佑による上奏、『唐會要』卷五九・戸部員外郎・會昌元年二月條の中書門下上奏を参照。

- (46) 「糧料使」と「供軍使」(あるいは運糧使・軍糧使など)が実際には同じ官であることは、同一人物の肩書が史料によって「糧料使」とも「供軍使」とも表現されていることから明らかである。例えば元和一三年、平盧節度使李師道の討伐が行われた際に行營糧料使となった王遂は、『舊唐書』卷一六二・『新唐書』卷一一六の本傳および『唐會要』卷七八・諸使雜錄上・元和一三年七月條では「糧料使」、「資治通鑑」卷二四〇・同年同月乙酉條では「供軍使」とされる。ちなみに「供軍使」は印を保有し(前掲史料B)、使院を持つ事例もある(『舊唐書』卷一四二・王廷湊傳、『資治通鑑』卷二四二・長慶二年正月己亥條には、「南北供軍院」の名が見える)ことから、糧料使より大規模な本格的な使職であったという推論も成り立ちうるが、もとより決め手はない。

- (47) 前註(8)鈴木論文(二)・五四頁、典拠は『舊唐書』卷一四七・本傳。氏はこの箇所において、和羅を擔う官として和羅使と糧料使のみを挙げ、前者が中央を、後者が地方行營を掌ったとされる。誤りとはいえないが、巡院など他の官司も和羅を擔っていたこと、これまで明らかにしたとおりであって、氏の圖式化は單純に過ぎよう。

- (48) 『冊府元龜』卷五〇二・邦計部平羅・長慶元年三月條、敕「春農方興、種植是切。其京西京北和羅使宜勒停。」

先是、度支以邊儲無備、請置和羅使、經年無序、徒擾邊人、故罷之。

- (49) 管見の限り、元和七年に韓重華が振武京西和羅使に就任したこと(『新唐書』卷五三・食貨志三)と、元和一四年に鄭覃・高鉞の反對によって中官五人の京西京北和羅使就任が取りやめになったこと(『唐會要』卷七八・諸使中・諸使雜錄上・元和一四年四月條等)の二例のみである。

- (50) 長慶中には貿易直によって「和羅貯備使」が設置され(『新唐書』卷二〇三・吳武陵傳)、會昌中に回鶻が北邊に侵入した際には李德裕が和羅使を置くことを請うた(『會昌一品集』卷一四「條疏邊上事宜狀」第三條、史料は後掲)。

- (51) 度支管下の營田使と認めうる事例としては、振武營田使(任估/史料E)、京西營田使(韓重華/表1參照)・京北五城營田使(潘孟陽/『舊唐書』卷一五・憲宗本紀・元和九年二月己卯條等)・銀州營田使(傅孟恭/『樊川文集』卷一八「傅孟恭除威州刺史・宣徽加祭酒兼侍御史依前宣歙道兵馬使知防秋事等制」)がある。いずれも北邊にある點が注目される。

- (52) 節度使が營田使や度支使などの諸使を兼任していく過程については『唐會要』卷七八・諸使中・節度使條等を参照。

- (53) ただし韓重華の場合は、『舊唐書』卷一六二・潘孟陽傳に、

……與武元衡有舊。元衡作相、復召爲戶部侍郎・判度支、兼京北五城營田使、以和羅使韓重華爲副。

とあり、副使だった可能性もある。この点については前註

(8) 青山論文・註(55)にも指摘がある。

(54) 日附は『舊唐書』卷一六・穆宗本紀等により、壬子に改めるべきである。

(55) 仁井田陞『唐令拾遺』田令三六條(典據は『通典』卷二・食貨典二・屯田)を参照。

(56) 前註(10)拙論参照。

(57) 『唐會要』卷七八・諸使中・節度使・元和一三年七月條、其年七月、詔曰「事關軍旅並屬節制、務繫州縣悉歸察廉、二使所領、管轄諸道、度支・營田承前各別置使。自艱虞以後、各置因循、方鎮除授之時、或有兼帶此職、遂令綱目所在各殊。今者務修舊章、思一法度、去煩就理、衆已爲宜。唯別置營田處、其使且令仍舊。其忠武・鳳翔・武寧・魏博・山南東西・橫海・邠寧・義成・河陽等道度支・營田使及淮南度支、近已定省。其餘諸道、並准此處分。」初景雲・開元間、節度・度支・營田等使諸道並置、又一人兼領者甚少。艱難以來、優寵節將、天下擁旄者、常不下三十人。例銜節度・度支・營田・觀察使、其邊界藩鎮增置名額者、又不一。前後六十餘年、雖官增減官員及使額、而度支・營田、以兩河諸將兼領、故朝廷不議停廢。至是群盜漸息、宰臣等奏罷之。

なお『舊唐書』卷一五・憲宗本紀や『文獻通考』卷六一・職官考一五はいずれも「度支營田使」としているが、當然ながらともに「度支・營田使」の誤りである。

(58) 潘孟陽の判度支就任は『舊唐書』卷一五・憲宗本紀より元和八年八月辛丑。

(59) 韓重華の營田については前註(10)拙論で觸れるつもりであるが、さしあたっては前註(8)青山論文を参照。

(60) 『舊唐書』卷一六二・王遂傳。

(61) また潘孟陽と王遂の對立が營田政策そのものの可否というより、むしろ「不協」という極めて私的な動機に起因しているところから考えるに、當時萌芽しつつあったといわれる官人間の黨派的對立も背景にあったのかもしれない。

(62) 業務によってははっきりと住み分けがなされていたものも確かに存在する。たとえば鹽政に關しては大中期までに鹽池ごとの分掌が諸司の間で確立されていた(前掲史料H)。ただしこれを、元和長慶頃には不分明だった諸司間の職掌關係が次第に分化していった結果と評價するか、あくまでも鹽政に限られた例外的なものと捉えるか、決め手はない。

(63) 中央集權化を推進する上で度支系諸司が果たしたもう一つの役割を指摘しておきたい。それは諸司に就任した者たちが御史あるいは郎官を兼帶し、地方の監察をも擔っていたという点である。巡院については『新唐書』卷二〇三・吳武陵傳に長慶中の狀況を、

…西北邊院官、皆御史・員外郎爲之…

と説明しており、また『舊唐書』卷一七下・文宗本紀に見える開成二年一〇月甲寅の敕には、

鹽鐵・戶部・度支三司使下監院官、皆郎官・御史爲之。

との一文があつて、知院官に御史・員外郎が充てられていたことがわかる。代北水運使については表1の如く、薛春・韓重華の兩名が御史を兼帶している。また供軍使(糧料使)に

つては、寶應中の迴乾糧料使陳少遊が侍御史（『舊唐書』卷一二六・本傳）、大曆初の河東糧料使于頔が度支郎中・御史中丞（『舊唐書』卷一四六・本傳）、貞元八年の靈夏二州運糧使鄭克鈞が都官郎中（『冊府元龜』卷四八四・邦計部經費・同年五月條）、會昌頃（河東・振武・天德軍營田供軍使であつた馬曙が御史中丞（『樊川文集』卷一七）、同じく會昌頃の靈鹽供軍使房次玄が檢校某司員外郎（『樊川文集』卷一九）という具合である。これらは所謂「出使御史」「出使郎官」であり、言うまでもなく地方行政における不正を監視すべく中央から派遣される官である。出使御史・郎官による地方監察の實效性については疑問の餘地があり、確かに過大評價しかねるところではある。しかしこうした傾向から、諸司が財務運営のみならず地方官に對する監察機能をも期待されていた、と推測することは可能であらう。

(64) 渡邊信一郎「唐代後半期の中央財政―戸部財政を中心に―」（京都府立大學學術報告・人文四〇、一九八八）。ここでいう戸部とは尙書戸部ではなく三司のひとつ戸部司である。  
(65) 『冊府元龜』卷六一九・刑法部案鞫・裴充條は、戸部で起つた和羅錢物の横領事件の顛末を次のように傳えている。

裴充、爲大理少卿。文宗太和八年十二月癸巳、命充與刑部郎中張諷・侍御史盧弘正充三司使、就御史臺推戸部錢物事。華州刺史宇文鼎・戸部員外郎盧允中・左司員外郎判戸部姚康並下御史臺推鞠。先是、宇文鼎妾支和羅官秦季元錢捌萬餘貫、姚康・盧允中與季元・楊洵美并典史等分取秦季元絹凡六千九百四十疋。：

現地官の華州刺史に加え、判戸部・戸部員外郎が不正に関わつたことが判明するが、主宰官までは明示していない。また「和羅官」の名は見えるが、錢物を管理する一僚佐であらう。

(66) 戸部巡官は元和六年四月に設置されたもので、その地位は員外郎と主事の中間に位置する。定員は二名であつた（『唐會要』卷五八・尙書省諸司中・戸部侍郎條、『新唐書』卷四六・百官志・尙書戸部條）。戸部和羅巡官の任命事例は『樊川文集』卷一九「趙元方除戸部和羅巡官・陳洙除長安縣尉・王嚴除右金吾使判官等制」に見える。また『金石續編』卷四「和羅粟窖軀文四種」の三・四番目には大中年間における戸部和羅粟收納の記録が見え、ここでは和羅粟の納入側・受取側雙方の擔當官が列擧されており、この時期までに下部組織が整備されていたことを窺わせる。

(67) 高橋繼男氏は「戸部巡院」に關する言及をされていない（前註〔28〕論文、および「唐後半期、度支使・鹽鐵轉運使系巡院名増補攷」東洋大學文學部紀要三九、一九八六）。しかし『舊唐書』卷一七下・文宗本紀・開成二年一〇月甲寅條には「鹽鐵・戸部・度支三使下監院官」、「冊府元龜」卷五一六・憲官部振擧・開成四年四月條には「三司知監院官」という記載が見られ、「戸部巡院」の存在が示唆されている。「監院」が「巡院」と同義であることについては、高橋繼男「唐代の地方鹽政機構」とくに鹽監・（鹽院）・巡院等について」（『歴史四九、一九七六』）を参照。ただし戸部巡院の場合、實際和羅に携わつた事例は見出し得ず、また度支巡院のよう

に「和羅巡院」と表記されるケースも認められない。

(68) 注意を要するのは、戸部和羅巡官は中央にあつて複数の巡院を統括する戸部司の一屬僚であり、個々の戸部巡院の長官ではないということである。「巡官」とは判官・推官等と同様「使職の一僚佐」の謂であり(前註(67)高橋論文)、「巡院の長官」では決してない。巡院の長官は知院官(知某院事)である。日野開三郎氏は巡官を巡院の長官とされているが、その根拠は示されておらず、誤りというべきであらう。(『支那中世の軍閥』三省堂、一九四二、のち『日野開三郎東洋史學論集』第一卷、三一書房、一九八一に再録。該當の記述は『論集』一二四頁にある。)ちなみに氏は巡院が鹽鐵使系と戸部系に分かれるとされ、度支巡院については言及されていない。

(69) 『樊川文集』卷一七「馬曙除右庶子・王固除太僕少卿・王球除太府少卿等制」。この制敕の發布年次は杜牧が知制誥・中書舍人であつた大中五年八月から六年までということになる。杜牧の官歴については倉石武四郎「杜樊川年譜」(支那學三一・一、一九二五年)を参照。

(70) 雲州防禦使支謨による代北水運使兼任については『資治通鑑』卷二五三・乾符五年正月條「考異」所引・趙鳳「後唐太祖紀年錄」に記載がある。

(71) 『資治通鑑』卷二五三・同年正月條。

(72) 前註(7)大津・荒川諸論文。

(73) 菊池英夫「唐賦役令庸調物條再考」(史朋四、一九七六)。

(74) 前註(73)菊池論文、および同「唐賦役令庸調物條に關する

一試論」(鈴木俊俊先生古稀記念論叢 山川出版社、一九七五)。

(75) 宮澤知之「唐より明にいたる貨幣經濟の展開」(中村哲編『東アジア專制國家と社會・經濟―比較史の視點から―』青木書店、一九九三、第五章・一九五頁)。

(76) 水部式中に見える諸々の徭役については、濱口重國「唐の白直と雜徭と諸々の特定の役務」(史學雜誌七八・二、一九六九)を参照。

(77) 同じ貞元年間の史料としては、『冊府元龜』卷四九一・邦計部蠲復・貞元三年十二月庚辰條が參考になる。そこには趙光奇という民が行幸中の德宗に對し和羅の過酷さを訴えた著名なエピソードが載せられているが、その訴えの中に次のような一文がある。

…始云所羅粟麥納於道次、今則遣至於京西行營、動過數百里。車摧牛斃、破產奉役、不能支也。…

吐蕃の侵入が最も激烈であつた時期という事情から考えても、また安史の亂後における役制の施行狀況に關する常識的な見方から言つても、ここで言う「奉役」の語を安史の亂以前の徭役と同一視することは難しいであらう。しかし民を強制徴發し、物資輸送に使役する狀況が貞元初頭に依然として残つていたことは確かである。

(78) 前註(10)拙論参照。

(79) 外山軍治「唐代の漕運」(史林二二・二、一九三七)。

(80) 『冊府元龜』卷五〇二・邦計部平糶・同日條。

(81) 『冊府元龜』卷五〇二・邦計部平糶・同月條。

(82) この事件は『資治通鑑』卷二三八では大中元年八月に繫年されている。

(83) 『新唐書』卷二〇三・吳武陵傳には次のような記載がある。

今緣邊膏壤、鞠爲榛杞、父母妻子不相活。前在朔方、度支米價四十、而無踰月積、皆先取商人、而後求牒、還都受錢。：

これは吳武陵が長慶年間に語った言葉であるから、「前在朔方」以下の一文は元和中の状況を指すと思われる。この一文は、商人が納入した穀物に對して手形が振り出され、それを都に持ち込めば錢が支給されたことを記しているようである。こうした方法は宋代以降盛んに用いられたものであるが、唐代の北邊では類例がなく、にわかには位置づけしがたい。假にこれがある程度常制化したものであるとすれば、「儼勾客運」どころか、さらにその一步先を行く手法が既に適用されていたことになる。ただ靈武地方は元和末から長慶年間にかけて屯田が盛んに開かれるまでは、穀物確保にかなり苦心していた(前註(10)拙論參照)。よって右の措置もそうした状況下での臨時のものと考えるのが妥當であらう。

(84) 青山定雄「唐宋時代の轉運使及び發運使」(『唐宋時代の交通と地誌地圖の研究』吉川弘文館、一九六三)、室永芳三「五代の北面轉運使について」(史淵八九、一九六二)、前註(67)

高橋論文、渡邊久「轉運使から監司へ——宋初における監司の形成——」(東洋史苑三八、一九九二)。

(85) 高橋繼男氏は度支「使」の管下に様々な「使」が置かれていく過程を、巡院制の複雑化という文脈で捉えている。そして前掲史料Eを取り上げて、水運使を度支管下の「使」の一例として擧げている。前註(67)高橋論文(特に註38)を參照。

(86) 前註(84)渡邊論文參照。

〔補〕 高橋繼男氏は先ごろ發表された論考「唐後半期の官界における知院官(度支・鹽鐵轉運巡院の長官)の位置について」(『堀敏一先生古稀記念 中國古代の國家と民衆』汲古書院、一九九五)において、戸部巡院の存在を指摘されている(六〇〇頁、および註(8))。しかし氏も述べられているように、現存の史料よりその位置づけを行うことは困難であり、今後の課題とされよう。

were also included within the scope of this exception. During the Qin Dynasty, the hierarchy that had existed in the Spring and Autumn period was abolished. The change of the scope was caused by an attempt to re-enact archaic principles in the newly established systems.

The system of "submission in cases of doubt" was permitted when the facts of a case remained doubtful, or in cases in which the decision agreed with the letter of the law, but the particular circumstances left people dissatisfied. A principle advocated in the Chun-qiu gong-yang-chuan 春秋公羊傳 was to pass sentence in consideration of the heart and mind, as well as of the letter of the law. Decisions based on heart and mind came into force as case law, however, this was not always consistent with the established laws encoded in the statutes 律 and ordinances 令, etc. This inconsistency enabled officials, particularly those who ranked under one hundred piculs, to pass arbitrary decisions. During the Later Han, in order to resolve this problem, case law that was inconsistent with the statutes and that justified arbitrary or cruel sentences was abolished. Such inconsistency was also caused by the disparity between archaic principles and the reality of the newly established systems.

## **FINANCIAL ADMINISTRATION ON THE NORTHERN FRONTIERS DURING THE LATTER HALF OF THE TANG DYNASTY: A STUDY OF THE LOCAL AGENCIES UNDER THE DEPARTMENT OF PUBLIC REVENUE 度支**

MARUHASHI Mitsuhiro

During the reign of Xuan-zong 玄宗, the position of Transport Commissioner for Shuofang province 朔方道水陸運使, the duties of which included the provision for the northern frontiers, was set up at Sheng-zhou 勝州. This position was taken over around 737 by the Transport Commissioner for the Six Fortresses 六城水運使 at Ling-zhou 靈州. The irregular and unexpected demand for commodities that arose as a result of the An Lu-shan's rebellion, could not be dealt with by the existing

organizations, including the Transport Commissioner for the Six Fortresses. As a result, the central government was forced to establish the Commissioners for levying rations 糧料使.

In the Zhenyuan 貞元 period, in light of the serious nature of the invasion from Tibet, the Department of Public Revenue founded larger-scale and permanent local agencies, branch officers 巡院 and the Transport Commissioner for Daibei region 代北水運使. Both of them were under the control of the Department of Public Revenue. By the Changqing 長慶 period, following Xian-zong's 憲宗 success in substantially depriving local Military Governors 節度使 of their authority, the fiscal control of Department of Public Revenue on the northern frontiers was established, which was administered by three kinds of local agencies (branch officers, the Transport Commissioner for Daibei region, and the Commissioners for provisioning the armies 供軍使). However, after the Uyghur's invasion in 841-3, this provisioning system could no longer function effectively. Subsequently, in Xi-zong's 僖宗 reign, the system was collapsed completely during the rebellion of Sha-tuo 沙陀 over the Daibei region.

Originally, the function of transport to provision the northern frontiers was in fact carried out by *corvée* labour. By the end of the eighth century, long-service soldiers 官健 came to be employed in this capacity. The system whereby merchants contracted for whole duties, adopted in other districts, does not, however, seem to have emerged at any time throughout the Tang dynasty.

## THE DONG HUA HOSPITAL, HONG KONG AND THE CANTONESE NETWORK: DISASTER RELIEF ACTIVITIES IN THE EARLY TWENTIETH CENTURY

HOKARI Hiroyuki

This paper comprises a part of my studies of the history of the Cantonese Network from the late-nineteenth to the early-twentieth century. In this paper I first analyze the structure and the activities of the Dong